ござ〳〵舟―ごた〳〵と個坐船とかくざやれ云々―冗戯でない本當と本町とかく、髮は由兵衛が舟遊して主人を饗す所瓜を二つ―似る事の譬に云ふ紫帽子云々―女形の被る帽子が水に映る道正坊云々―坊主が水垢離して祈れば病氣本復す茶船云々―嫁が里歸の船もあれ

二郎兵衛おきさ　今宮心中

作者　近松門左衛門

音頭　ゑい〳〵〳〵ゑい〳〵、月見花見は何所も同じ、諸國名所のその中々に、たぐひ浪花の舟遊び、老も若いも下人も主も、男女がござ〳〵船に、袂涼しき川風は、秋と云ひても虚でないよの、じやれでないよの本町橋を、漕出て見れば天滿川、市の側成初甜瓜買ふて冷してひいやりと、瓜を二ツに打割ば、似たりや似たり燕子花、紫帽子河水に、映らふ影を水汲みが、汲で荷ふて　謡持や桶の棒、坊主頭を振立て、道正坊の金柄杓、あれあれ撫て通れば一撫に、はや本復の伊丹酒、茶舟で下る樽肴、在所嫁御の里歸り、上荷で送る葬禮や、世の有樣のさま〳〵を、一時に見る舟遊び、是常になきお肴と、一つ勸むる盃や。謡　然れば船のせんの字を、君にすゝむと書キたり。船の屋形に三味引ば、納屋に油の臼を引、はしのいよ此はしの上にて賣る聲は、煙管團扇煙草入、役者評判扇賣、浪花藝者の風俗を、橋々名所に擬へて、書集めたる藻鹽草、甲「いせおの海士に有ね

ば驛式を送る船もあり　宇船は公にぶねと書く　船ないよこの—いよこのは前のよのと同じく拍子詞（松の落葉）浪華藝者—藝者は舞伎役者—いせもの—浪花の流は伊勢の清荻の歌に上れり　龜井橋—此處に天神のあ旅所あれば云ふ　桂木常世—共に女形の役者　新鞠—賢魚の町　なればしは〳〵—愛嬌あるに取る　雀鮓—雀鮓の名物ありて味よき故　蝋—蝋に喪ある如く辛い所もあり　上村吉彌—美し

共、其はま荻の八重桐を、龜井橋じやとおしやる」乙「心はの」甲「先はおたびの神かけて、跡先に又續く者がないは扨」甲「袖島源治は新鞠じやとおしやる」乙「それ何故に」甲「鹽物町のしたゝるたる、然も藝には骨が有といの」甲「桂木常世はゑのこじまとよ」乙「なぜなぜ」甲「ゑのころ〳〵抱寄せて手飼に愛らしや」甲「扨又嵐三十郎かつほ座橋とおしやる」乙「心はの」甲「何の料理に遣ふても仕出が甘いは扨」甲「櫻山庄左衛門福島じやとおしやる」乙「心はの」甲「小柄なれ共張詰て舞臺一ぱいかさも有、藝に味も有、口中のしより〳〵したる雀鮓、夫で蓼穗の何所やらが、ひりゝとする」とぞ答へける。甲「音羽二郎三を雜魚場とは」乙「鰭が有との譬かや」甲「上村吉彌は伏見堀じやとおしやる」乙「義理はの」甲「舟板町の舟板の末には沖に乘出し、帆を充分の印とて今から人や焦るゝと云事」甲「扨市村玉がしは、梅田橋と見立たり」乙「夫何故に」甲「はて渡れば色町、越れば火屋、濡にも憂にもよふうつるは扨」乙「杉山平八を四ッ橋とは是どふじや」甲「江戸からも京からも四方へ引つり引張た、蹈ばつたがつて山村が、くはつとひらけた兩足は、音羽百間堀を思ひ出す。善惡二ッを嚙分ケて、六義を紛す芝崎に、思案橋を思ひ出す。篠塚二郎左を見る時は、大佛島を思ひ出す。三代續く奴風、嵐が風姿を譬ふれば、其江戸堀を思ひ

き女形、柳亭弦
鶴に園あり
焔る—潤がるに
かく
火屋—火葬場
山村—歌左衛門
芝崎—林左衛門
江戸堀—江戸風
なる故
猪喰屋橋—猪喰
うた縁いと云ふ
故
如法—柔和（俚
言集覽）
しにせ—老舗の
活用
くはいはいけい—面
目
いきやすふて—
出來易くて
きも入—世話

出す。嘉十郎が貞付に炭屋町を思ひ出す。敵は三原重太夫、序にて作りし悪心の、切りで返報のくる時は、猪喰屋橋思ひ出す。思ひ出し〳〵陳ね行く。先是迄が片おもて、裏の御堂も高々と、立賣堀を潜廻し、辨當濟ば碗家具も、釜もちやく〳〵あらや橋、跡へはんなり入花の、茶びんご橋はこち〳〵」と、寄よ〳〵濱際の瓦町橋にぞ著ける。蓑屋介五郎は如法成氣も丸額にこやかに、今「申婆樣母樣、此永き日の馳走ぶり、亭主由兵衛さぞ草臥、暮も近し是からお上りなされ」と有ければ、隱居の貞法七十三眼鏡要らず杖つかず、齒は一枚も拔目なき、男勝りのかみ樣にて、「ヲヽそれ〳〵、是由兵衛、念の入た馳走でいかひ慰。此方の内から出た人が、店一軒の主に成商賣もしにせて、親方一家を饗應とは此方ともくはいけい其身の手柄。去りながら女房がなければ、人の世帶は落付ぬ。身代樂の女房を早ふ持て落つきや。左樣でないか」と有ければ、内義も共に打笑ひ、内「何故に女房持やらぬ。但何處ぞに思ひ入がなあるかいの」由兵衛思ふ圖に乘りて「誠に今日はお心よふ、お遊びなされし忝さ。其上女房のこと迄お尋。御意の通少思ひ入御座れ共、此女房がいきやすふていきにくい。どふでかみ樣おゑ樣の、お口を借ねば參らぬ事」貞「はて此方連が云ふて濟事ならば、きも入らいで何とせふ。其思ひ入の名

は何と云誰ぞいの」由兵衛殆ど笑壺に入、「ヤア有難い忝い、三度禮拜仕る。名を申せばつい御存じ。されば共先唯今は、お名をばゐ申まいよの。しやん〳〵、サア是からが本酒、亭主から又はじめ　憚りながら介様へ、お肴にごぜ殿一節賴む」といひければ、介五郎盃うけ、「申かゝ様、二郎兵衛が法隆寺より戻つたら連て來て、彼れが好の心中を語らそ物」内義「チゝさればいの。切てきさが居たらば、祭文を聞ふ物」と、いへば由兵衛興醒顏、「ムゝ二郎兵衛は母親の年忌に當り、在所へ參ると申たが、きさも一所に二郎兵衛と連れだつて參つたか」内「アゝつがもない、きさは此比風引て頭痛がするとて宿へ往た」と、聞もあへず由兵衛、「エゝ内方も此方等が居た時分と違ひ、自墮落になつたなあ。青二才の二郎兵衛め、丁稚上りの分として、母の年忌で候ふとて此忙しい最中に十里近ひ法隆寺へうせざまが氣に入ぬ。殊にきさが煩ふて宿へ歸つた時分に、同じ樣に家を出、祿な事は仕出すまい」と、滅多無性に一人腹、人も知らぬ心を苛ち、船辨慶にあらね共、謠友盛が沈みし其有樣に、又由兵衛がしんきをもやし、舟端蹴たて盃踏わり、前後を忘ずる計なり。菱屋一家の人々は何の心も付ざれば、「はや日も暮れた、最早是から歸らふ」と、上り支度を由兵衛、「危ないことはちつ共無し。挑灯用意致せし」と、

ごせ殿・盲目藝者

つがもない―途方もない

友盛―平知盛のこと

沈みし有樣―謠曲船辨慶の文句をとり「又義經をもと」の句を又由兵衛ともじりたり

裸身云々―男は裸百貫の諺をとる

是ならぬ―これはどうもならぬ

もやくつて―不快にて

御訴訟―お頼み

聞かいでは―下になちぬの語を

取出せしが南無三寶、曳「蠟燭を忘れた是久三、太義ながら一走り、此通りの百貫町、四五丁往ばおきさの宿、定て知てど有ふぞ。巾兵衛が申、蠟燭一挺貸てたも。ちつと氣色が能ならば、ちよつと爰迄出てたもと云て同道してをじや。序に内に氣を付て誰もないか見廻しや。早ふ〳〵合點か」久「心得ました」と帶もせず、襦袢一つの裸身や、百貫町へぞ走りける。昨日今日前髪取つて下手代、未だ新物の二郎兵衛、おきさと深き中入の、南京綿の上べには手のない樣に仕立口、在所はいかな横堀の、知邊の許に隱れ居て、暮れば其處へと通路の、三丁ほどに見ゆる彼の舟の屋形には、貞法樣おゐ樣、袖には安東寺町の巾兵衛、ヤア是ならぬ外しませふ。ありやどうじや。菱の提灯久三が持て、跡から來るはおきさじや。樣子が無ふては叶はぬ筈」と、氣ももやくつて蒸暑き、材木納屋に立隱れ、事の樣をぞ窺ひける。きさは程なく走り寄り、「是は〳〵皆樣今日はお慰み と只今久三の物語、私が氣色も云々とは無けれ共、かみ樣おゐ樣へ頼み上ます御訴訟事、直に是へ參りしも、アヽおとましい事出來まして、一倍氣合に當ります」と、溜息吐て居たりけり。貞法もつく〴〵見て、「此方へ訴訟の事有とはどうした事ぞ吡して見や。成べき事なら聞いでは」と、さも念比の詞の末、きさ「アヽお馴染とて忝や。昨日の暮かた

三田から、私が父親登られ、幼少時から在所で約束し置いた、男の姑の煩故、急に嫁入を急いで來た。此度お暇申受、三田へつれて歸りて嫁入さすとの申分。御存じの通り私は幼い時より大坂に育ち、手いたいことは仕付ず、殊に病者な身を持て、在所の手業がなんとして。夫故當座の間に合に、「内方のかみ樣が御念比に遊ばし、舊功なした若い者共數多の中、一つにして此大坂で、物の見事に躾て遣ふ。必外へ約束すなと常々のお詞、是が反古に成物か。在所へとては歸るまい」と私は申ます。「夫では親の一分が立ぬ」といふての親子いさかひ、多分是へ見へませふ。私が口の合ふ樣に、在所の嫁入をお止めなされ下され」と、つど〳〵語る下心、二郎兵衛は合點にて「彼の云分は我故。男に親を見返る心中者め」と、材木に抱付ぞく〳〵悅び居たりける。親はとほ〳〵尋付、「菱屋殿のお船は是か。きさが親三田の太郎三郎で御座ります」「ヤア親仁殿か。それ酒進ぜ茶進ぜ」と、取々挨拶ありければ、「いやお茶もたべました。定てきさめが咄しでお聞なされませふ。在所で許嫁の方より、急々に欲いと申に付、中途ながら一生の身のかため、「ことわり立てお暇取れ」と申せば、「在所へは往くまい、大坂で男を持つ」と申。「夫は我儘親のいひじよを背くか」と叱つても聞入ず。「おれが男は内方のかみ樣次

入れて見よ

手いたい―荒仕事

云ひじよ―云條

こうげん―權力前に出ヅ

世渡佛法云々―佛法よりは食ふ事が肝腎といふ譬

もむない―むもない（甘くない）の轉

かこふか―與（やろうか

第に任せて有。是非とも親のこうげんに在所の男持てならば、己や死るが合點か。娘殺そと云事か」と大聲上げて吠ゑまする。お主のお慈悲に御異見を賴みます。在所の婿と申も喰兼ぬ身代、行きをれば彼奴が果報。世帶佛法はら念佛、口に喰ふが一大事。彼奴が喰ふは違ふて、大坂の男に喰付たか。やい其處なうつけ者、在所の男じや大坂の男じやとて喰ふに二ツの味なし。一人の娘に親の身で、もむない男を喰そふか。エヽ親の思ふ程にもない」と、涙を流し恨みける。おきさも流石親心、思ひやれ共二世かけて、かはせしことも捨られず。「只かみ樣のお情を、賴みまする」と計にて、同じく泣ひて居る姿、貞法も不便さに、「親仁の云分理が聞へた。去ながら彼のきさが病者で、在所方の荒働き一年と續くまい。身に藝もないことか、銀の湧く手を持つて居る。二百目近ひ給分を、唯の女子にかこふか。廣い大坂に男養ふ商賣とは彼れらが職。五人三人は針一本で、樂々と過す手を持ながら、山家在所へ煩ひに往ふとは、無分別かと思はるゝ。此談合は取をいて、きさは此貞法にとんと預けて置てたも。此方の家にも子飼の者朕る者がたんと有。能い婿取て後々は、親達も大坂へ呼ぶ樣に仕て遣ふ」と、念の入たる割口說、由兵衛扨は彼のきさを我等へ隱居の心當。日比の念願成就と、曳是親仁、隱居樣へ任

せて在所は變改したがよい。此由兵衛も旦那の陰で、安東寺町に手も擴ふ商賣し、手代の一人も遣ふて今日の樣な饗應に、二兩三兩遣ふも皆親方の光り。未だ女房を持ぬはかみ樣へ　とんと任せて彼方の媒妁待て居る。かみ樣のお心で此方と私が婚姻に、成まい物でも御座らぬ。なふおきさ左樣じやないか」と、いへ共きさは胸塞り、「アヽどうやら知りませぬ」と、打傾ぶきて居たりけり。太郎三郎一々に聞屆け、「きさめが申た分では、さら〳〵胃の腑に落ませぬ。かみ樣のお御意で發起致した。御尤々々親方の躾らるゝと申に、先は幸一門中、何の子細も申まい。此上はきさめが緣付はどうなり共。最ふお暇」と立んとすれば、由兵衛分別顏にて、「是貞法樣、是は大事の請取物。おきさも若い人の事、後日のもや〳〵やかましし。ちよつと親子に手形させ、きさが緣付、貞法樣のお指圖背くまい。外から一言邪魔させまいとの手形が取たい物」と差込ば、貞法打頷き、「是は由兵衛が云通、手形を取て置たい」きさ「夫でも父樣無筆なり、明日でも私がかみ樣へ手形して上ませふ」と、辭退する程由兵衛、「いや〳〵たとへ無筆でも。判がなくば筆の軸、手形は我等筆取」と煙草盆の硯引出し、はや書付ける提灯の陰、二郎兵衛見すまし聞すまし、三「ヤア彼奴が勸めて手形させ、かみ樣たらしてきさを囃ふ分別。此判させて

もや〳〵—問答

書付ける—火をつけるにかく

荷が下り―縁になる
判をすや―判を据ゑよ也

石打―嘗時婚禮の夜に瓦礫を飛ばす風習あり元祿二年之を禁ず

敗もう―閉口
てんがうーいたづら（俚言集覽）

は一大事、何とせふぞ。石を打て提灯を打消してのけん」と、石を尋ねる其間に、手形の文言思ふ通に書濟し、曳「是宛名は菱屋四郎右衞門樣貞法樣、親三田村太郎三郎、サア印判」と云ひければ、本「御念が入て忝い。私の荷が下りました」と、巾著の印判くろ〳〵と、「サアおきさ我身も判をすや」きさ「いや私は印判持ませぬ」父「左樣なら父が裏判を」と、同じくすへて「貞法樣、いよ〳〵賴み上ます」と差出せば、貞ヲヽ〳〵是では此方も如在がならぬ」と、數珠袋に納むる内、二郎兵衞溝の石をあげ、由兵衞目がけて打石が、舳板に當つて一はづみ、川へざんぶと水散て、由兵衞一絞り、「そりや暴れ者が石うつは」と、立ち上る所を續けて打てば、由兵衞が額に當つて「あいたしこ、是は危し。皆々屋形へ。きさも乘つて戸を立や」と、無理無躰に舟に乘せ、「親仁」も早ふ去つしやれ。負傷さつしやれな」と云ひけれ共、本「いや〳〵是は目出度、きさが嫁入の談合に石打とは吉左右。目出度御座る」と云ふ小鬢に、はたと當れば「南無三寶こりやどうじや。目出度過て目が出た」と、抱へてこそは歸りけれ。猶も續けて打つ石に、提灯も打破れ、由兵衞も敗もうし、「おきさに心有奴が、てんがうかはくに紛れない。船頭船をやつてたも。久三おじや、此奴を踏んでくれふ」久「任さつしやれ」と上るを見て、二郎兵衞横へきれ

たくみかけて―謀けざまに

うなよく―うぬはよく

聞えぬ―判らぬ

身の邊―邊にかけて身の災難を云ふ

てぞ三重歸りける。由兵衛久三大汗にて、「何方へうせた〳〵」と、橋へ廻れば年ばい成牢人侍　髭奴の草履取、何心なく來る所を、うぬ覺えたか」と久三郎、奴を橋へ横なげに、眞向を四ツ五ツ疊掛けて喰はする。主人是はと立歸り、久三を摑んで打付、踏付〳〵踏む所へ、由兵衛駈付、由「ヤア爰にけつかるか。よふ舟へ石打つた」と、摑み付手を確と取り、侍「何さ石打たとは誰が事。慮外者め」といふを見れば歴々のお侍。由「アヽ御免なりませ。人違で粗相致しました、御免されて下されませ。お慈悲で御座る」と泣叫ぶ。侍「何のお慈悲」と捻上、向脛をはたと蹴返し、「是奴、腸の出る程此奴踏め」奴「任せておけろ」と土足にかけ、奴「うなよく身を打せたナア覺へて居ろ」と、胴骨尻骨うんと踏めば「ぎやつ」と云ひ、うんと踏めば「ぎやつ」と云ひ、目玉も出る計なり。侍「もふよいはよいは死ぬ程にしてをけさ。此方へ來い」と主從は、悠々として歸りけり。命から〳〵由兵衛、「あ痛〳〵」と起上り、由「久三其處にか。エヽ聞へぬぞや。今の樣に踏居るを、見て居やる筈は有まい」久「ヤ此方が聞へぬ。此方故に最前喰はされたり踏れたり。エヽ振廻喰ふた計に、云れぬ人の肩持て、阿房くさい振廻が戻つた。御座れ戻ろ」と立上る。由「ヲヽ其方は切て振廻を喰ふたが、此方は物入振廻ふて、揚句にしたゞか踏れた。向後邊應

致すまい。御馳走が身の菱屋、酒盛つて尻踏れた」と、獨言して三軍歸りけり。

中之卷

本町や新物店の若衆は、女とも見へず男なりけり。女子交りの針仕事、つい一針が永き世の緣の端縫しどけなく、尻も結ばぬ糸櫻、綻びかゝるうたてさよ。二郎兵衛は在所より、戻つた顏して二三日、仕事は常より精出せ共、きさにすね言ねすり言、乾反し直し上下を、盤にかけて打けるが、二「エヽ是は糊加減の悪い袴じや。よそ〳〵の人の心の樣に、彼方へ這入たり此方へはひつたり、移り易いどう根性。なふおきさ殿、此方が頓てかみ樣の肝煎で、安東寺町へ嫁入の時、此袴を婿殿に著せたらよかろ。其晩に石打れて小鬢先割れぬ樣に、抱締て居さつしやれいの。おきさ殿やいのおきさ殿う」きさ「チヽかしましい、己や聾じや御座らぬ。是此私が仕立ヲる布子も、誰やらが氣によう似て、なんぼ直に縫ふても、横へ〳〵といきをる。間分の無いものは、此方に似合ふ著さつしやれ」二「私等が氣には入ぬ」と云へば、きさ「ハテ氣に入ずは打破つてのけたがよい」二「ムム打破つてもだんないか」きさ「夫はどうして打破る」二「まづ此樣に打破る」と、槌振上

つい一針云々―つい糊染んだが縫て後に顯れて大事となるを戯縫にかけて云へり

抑言―當てこすり

乾反―日に當りて反りかへる

だんない―大事ない

渡ちぬ先云々―正月七日七草をうつ時の唄に唐山の鳥と日本の鳥と渡ちぬ先にストトンとあるをとれり

無用云々―暮なもの故用ひてなちぬと申したり

點―灸點をもろす

て打ッ盤をとん〳〵〳〵、三「何處やらの男と、よそ〳〵の女と、渡らぬ先に」とん〳〵とん、とゝんとんとぞ打にける。重手代口々に「やい〳〵ほたへな。夫れ向ひの出見世から、旦那のわせる見へぬか」と、云所へ四郎右衛門は、眼病に毒とは知れど渡世の世話、「なんと仙臺の注文は仕廻たか。秋田の荷を積だらば、今橋へ往て銀請取りや。ヤア卜庵老は未だ見へぬか。卜庵が見へたら灸をせふ。女子の手が藥じや、きさに點へて囉はふし、二郎兵衛に手傳さしよ。手のふるはぬ樣に仕事しまへ。殘りの者は出見世へいけ」と云所へ、「物もふ、澁川卜庵御見廻申」と、つゝと入れば、四「ヤアお出か待かねました。先是へ」と上座へ通せば卜庵、「今日は廿三夜なれど一向宗はお構ひない。明日から八專土用前、一段とよふござろ。どれ脈を見ませふか。私の申た通藥喰をなさるゝか。ハアいかふ脈がよふなつた。玉子を參る驗しに、左の脈がふは〳〵と打まする。ムゝ魚の中にも鰡などは大うんの物、かねて無用と申た、よもや喰ひはなされまい。右の脈があたまがちなは、若し樝木などは參らぬか。風氣もなし點を致そふ。硯々」といひければ、四「奥で點を賴みませふ。是きさ二郎兵衛、油火灯して艾をもみ、先一三百ひねつて置や」と、打連れ奥に入りにける。「あつ」といふて二郎兵衛行燈灯しつ土器あぶ

ぴかしやかーちやが〳〵と當てこすりのありたけいふ

こらや〳〵ー塩忍々々

まそつと云々ーモウチツと遊んで炙の勞を慰むる饗應の仲間入をせん

り、艾出して揉んとするを、きさは立寄り胸倉取、「是あんまりじやぞや酷いぞや。先度から染々と物いふ間も無い故に、心底が語りたさ、傍へ寄ればぴかしやかと拗言の有ルじやう。安東寺町とは何事じや、アヽ嫌らしい〳〵。是なふ誰しも此方の年ばいでは、十六七の振袖を好このむ最中に、四ツも五ツも年かさの私にほれて下された。私や其心に打込で親兄弟も捨たぞや。在所は生れ古郷なり、兩親の傍に居る物が、往ともない筈はない。何の由縁に大坂に、執心はなけれ共、此方と云人に離れるが悲さに、お主を欺し親に背き　身を狂はす心を　可愛や共云ずに面白そふに拗言。コレ死んで見せふか。死兼は仕ませぬ、二郎兵衛殿」と抱き付、聲をも立ず隱し泣。二郎兵衛もしほ〳〵と。「こらや〳〵」と背中を撫で、共に涙を流せしが、二「シテ先度の手形の文言は、どうぞ〳〵」と云所へ、卜庵奥より立出る。二「ヤ是はもふお歸りなされますか」卜「されば歸らふか　まそつと遊んで炙行の相伴せふか。やあゐい」と煙草盆引寄る。二人は艾拵へながら、此首尾に語りたし。早ふ去ねがな〳〵と、蹠けど去る氣色なく、卜「なんと炙行いひ付は無つたか。冷麥か素麵か、なまなか茶漬位なら、いつそ戻つて寢てくれふ、内証知しや」と云ひければ、きさは悅び差心得、きさ「旦那樣は毒斷で夜食はあがらず、

卜庵樣へはつい茄子の淺漬で、茶漬進ぜとおゐ樣のいひつけ。早ふ歸て御寢なつたが增しで御座ろ」とたらせ共、卜「何じや茄子の淺漬じや、一段よからふ。夫に出花をつけたらば」と、茶臼形になるを見て、おきさも惱れ、「寧そ泊つて御座んせ」と、佛頂顏に二郎兵衛艾に火を付庭の隅、卜庵が雪駄の裏、物は試と煽ぎ立煽ぎ立てぞ燻らする。まじなひは理外にて卜庵氣にや徹しけん。卜「是は不思議千萬、俄に宿へ歸りたい。もふ往ましよ。滅多に往とうなつて來た」きさ「ハテまちつとお遊びなされませ」卜「いや〳〵俄に往とふなつて、足の裏がこそばい」と、疊に足をすり付〳〵降りければ、二郎兵衛雪駄をちやくと直し、二「申卜庵樣、旦那の眼も直りませふ。灸が早ふ驗ました」と、いへ共我身の上とは知らず、卜「ヲヽ卜庵が名人御覽あれ。一炷で驗が見へましよ」と、足の踵のきび惡げに雪駄擦せて歸らるゝ。二「サア旦那の出れぬ間に手形の文言早ふ聞たい〳〵」きさ「さればいの、文言は何樣やら讀でも聞せず、宛名は菱屋四郎右衛門樣貞法樣親子が印判しました」と、語れば二郎兵衛はつと驚き、「エヽ由兵衛めが文言聞さぬは曲者。娘きさを由兵衛殿へ遣はさふと書たやら知れぬ。日比和女に心を盡す由兵衛め、どうこけても己奴が爲の、よい樣に書たは定。三田の親仁も粗相な、手形の文言吟味な

出花―茶の煎じたて
茶臼形―くつろぎて坐する形容
雪駄の裏―人を去ちする咒
理外―理外の理
滅多に―矢鱈に
こけても―變つても

慾徳云々―慾徳にあらず

こぶ圓―昆布にかく

灸のばゝ―ばゝは黄、灸の灰をいふか

灸ばし―灸をつまむ箸

水が沸く―灸の跡が脹持つとつや氣タップリとかく

皮切―初めて灸据うる事、始め

しに判するといふ樣な。是後の邪魔とは其手形、どふぞ手形を盗んで破つて捨たい物じや」といへば、きさ「ア、苟且にも盗むと云ふは恐い〳〵」二「ハテ錢銀の手形か慾徳になるにこそ。傍輩由兵衛との色づく、旦那に損徳かゝらぬこと。何時も彼の簞笥に手形ども置るゝ、鎰はそこらに見へぬか」きさ「何の爰等に置れふぞ。おゐ樣かみ樣旦那樣、三人の外介さまへさへ持されぬ。何時ぞ序にかみ樣頼み、文言見たがよいはいの」と、いふ所へ四郎右衛門「なんときさ二郎兵衛、艾が未だ出來ずば向ひの出見世へいて、女房共にも撚つて囉へ。更ぬ先にしまひたい。どふじや〳〵氣がせく」きさ「あい〳〵灸も皆出來ました。御勝手に遊ばしませ」四「そんなら爰で斯ふ向いて、それ二郎兵衛、菓子盆あられ煎豆、さんせうにこぶ團敷け」と、袷くるりと灸のばゝ、前を後に目は見へず、何をせうとも頷いて、くすり〳〵の灸ばし、痴話の便りの薄煙り、十四の灸に水が湧く、盛りの女盛りの男、手をしめ身を撫で口を寄せ、誰を忍ばんさしも草、是ぞ因果の皮切なる。やう〳〵灸もすへおろす、主人の帶の前巾著、後へ廻る紐とけて、裂ぎし鎰は巾著より、半分こぼれかゝりたり。二郎兵衛見付て、簞笥に指しきさに目くばせ、天の與へと取んとす。きさは「嫌じや」と手を振れば、二「大事ない」とて頭ふる、手をふる頭

の意　きさ―燈なる火　三原―備後三原の刀匠代々正家と稱す　相口―短刀　蓮如樣の云々―蓮如の書かれし南無阿彌陀佛の六字

ふるひ〳〵、手を出し手を引かゝ猫の、おきをいらふ危さや。きさ「申旦那樣熱くば少押へましよか」四「いや熱うはないが精がつきた。よい加減にをきたい」きさ「まちつとでござんす。夫れまちつとじやゝ〳〵。夫やよいは」と鑪引出せばうろたへて、はしの灸を取落す。四「熱やゝ〳〵、もう〳〵是でしまはふ。奥へ往てちと寢よう、二人ながら休んでくれ。能ふ仕てくれた過分な」と、惡事と知らぬ主の慈悲、仇となつたる身の果の、冥加に盡しも道理なり。二人は顏を見合せて　三「鑪を取りは取たれど、主の目を晦ませば胴が慄ふて恐ろしい。誰ぞ來るか番しや」と、合せて見たる簞笥の鑪に、あたるも地獄の鉦前を、明て搜せと衣類の外は、三原の相口時代の印籠、箱に入しは蓮如樣の名號。三「ハア合點のいかぬ、手形箱は何時も土藏へは入らぬが、戸棚に入たか知らぬ」と、常見覺へし戸棚の鑪、なんの苦もなく戸を引明、搜せば一通上書に手形と有。三「サアかたじけない。是が欲さの狂亂」と、戴き〳〵二ツ三ツにひきさき、懷中に捻込で、跡しまはんとする所へ、三「門を明たは誰そ」「だんない者」と由兵衛上り口迄つか〳〵と、影を見るより二郎兵衛戸棚の内へはひ入ば、きさは前にひつそふて、「ハア由兵衛殿か、上らしやんせ」と後手に、そろ〳〵戸棚を鎖にける。由兵衛とつくと見澄し、「旦那は灸を

消入る―二郎兵衛が烟の中にて死ぬる心地

釣れた―黙された

あた―出撃

なされたけな」と、つょと上つて「是やなんじや。大事の鎩共取散し、簞笥の口も明て有。是おきさ退や、此世間物騒に戸棚の錠は何故おろさぬ。左らば鎩も腰につけ、錠をおろして置ませふ。ャァしやんとな」とおろす錠の音、内に響けば消入る心地、きさはわな〳〵〳〵と、直に死たい計にて、前後にくれてぞ見へにける。由兵衛きさが手をむずと取り、「是おきさ、先度舟へ石打れた其独が是未だ治らぬ、此打手が知れました。今宵旦那の戸棚へ入た盗人と同人。定て此方も助けたからふ。戸棚を明て沙汰なしにしてやろか旦那の耳へ入うか、此方の心一ッじや。なんと〳〵」と云ひければ、「手を合せて頼みまする。日比は恨も有筈を打捨て其詞、生々世々迄忘れませぬ。一生の内此御恩、どうして成共送りませふ。どれ鎩貸んせ明けましよ」と、取付ば押退け、曳「ャァうまいこと云やんな。何時ぞ〳〵と今迄釣れたは何十度。此以前貴様が津山玄三殿に奉公した時から、惚て居た此由兵衛。是非思ひを晴さふなら、和女の口へ手拭捻込で、寝る術も知たれども、夫は戀とはいはれぬ。此戸棚が明けたくば、此首尾につい、ちよつと、身を汚して下され。ちよつと〳〵」と、取付ば突放し逃て廻れば追廻し、抱付所を、きさ「あた面倒な」と突倒し、「由兵衛の生畜生、文言知れぬ手形に能ふ判をさしやつたのふ。今

忝い云々―慮と反對にいふ

其方と寢たらば、なんじや戸棚を明てやらふ、忝い嬉しい。夫が嫌さに此苦勞。云ひたくば云や大事ない。二郎兵衞殿と此きさと念比を仕て居る。戸棚の中なは二郎兵衞。私も科は脫れぬ。辭ぬ仇に訴人しや生畜生の死畜生」と、所存極し涙の躰。由兵衞聲をたて、「ヤァ若い衆は出見世にか、盜人が入つたぞ。久三や竹は宵の口、何所に居る」と呼はる聲、貞法始め長兵衞權兵衞、皆跣足にて駈付る。由兵衞威丈高に成、「是御覽あれ。旦那衆の腰を離れぬ此鎗を盜み出し、彼の如く簞笥を明、戸棚を明し所へ、身が來るを見て戸棚の中へ逃こんだ、所をしやんと錠をおろした。中に居るは二郎兵衞、手傳は此おきさ、證據人は此由兵衞」と、出來し顏の腕捲り、きさは涙に性根もなく、内外の者ははつと計、顏を眺めて居たりけり。貞法鎗を腰につけ、「四郎右衞門は最ふ寢てか。旦那に聞せて兎も角も思案が有ふ」とありければ、由兵衞先町代を呼びにやり、宿老殿へ知せて、町中挑灯縄よ棒よとひしめけば、奥より「由兵衞〳〵」と、手を扣いて呼はるゝ。由「あい」と答へて奥に入ば、四郎右衞門小手招き、「次第とつくと聞屆た。子飼と思ひ肌を免し、扨も〳〵憎い奴。灸の間に鎗取は、恐ろしい仕方。去ながら己が聞ては六かしい。夜中にわやわや町内の外聞も能らず、外へ物さへ散ずば己が聞ぬ分にして、

よざと―いざとに同じくすぐ目が醒るやうにとなり
代待―代、祭（個言集覽）

濟し樣も有ふこと。何いふても夜が更る。二郎兵衛めは籠の鳥、其分で戸棚に置き、きさめは今宵請人の、姉めに急度預けにやりや。急ては粗相も有物、とつくと分別して見よふ。女房子共が怖がらふ、直に出見世に泊まらしや。手代どもゝ向ひへ、母者人は爰へ來て、お寢みなされと申て、其方も歸つて明日おじや。必何にも穩便に、宵の中に皆寢さしや」と、蚊屋に入れば、山兵衛元の所に立出、「夜中に旦那のお耳に入、眼病に障れば如何、何事も明日の事。是長兵衛權兵衛、太義ながら此きさを、請人の姉女夫に急度預けて、直に出見世へ往て寢や。サアきさ立」といひければ、きさ「中かみ樣參ります。私が身は構はね共、二郎兵衛に科の無い段は申譯の有事。お孟樣へもお取成萬事賴み上ます。盜人の名を取、是が悲しう御座んす」と、わつと泣出し送られ行く、日もあてられず不便なり。由「サア貞法樣奥へござつてお寢み。我等も明日早々。久三も表を能ふしめて、よざとに寢や」とて出ければ、欠を直に「あゝ」と云ふ、返事眠たき夜なか聲、廿三夜の代待や、門の通りは未だ四ツ、内は靜まる燈火も、心も細く更にけり。物の憐深きこそ、後生願ひの心なれ。人も寢入て貞法は、寢醒の床を起出て、戸棚の傍に差足し、貞「こりや二郎兵衛、いきずりめ、聲聞知たか阿房め」と、こと〳〵と敲かるれば、

地獄で地藏に逢ふ心地、二「ア、かみ樣かお恥しや。庖丁でも薄刃でも、柄を脫て戶の間から、そつと入て下されませ。お馴染だけのお慈悲ぞ」と、泣く聲漏る計なり。貞「ヤレ死る程の性根でさもしい事をする物か」と、袖を覆ふて錠鎰の、音せぬ樣に戶を明て、「其處へ出おれ。町人といひ年寄の婆なれど、菜刀でなり共、己が首を切て遣ふ」と、故意と詞をあらゝかに、叱られてしよぼ〳〵と、はひ出る帷子も汗にひたりて、時の間に顏も痩たるむごらしさ。流石子飼の主心、叱る心はわきへなり、思はず涙を流さるゝ二郎兵衞顏振上「貞法樣面目も御座りませぬ。お主の罰」とばかりにて、はたと俯伏し泣きけるが、三「御存じの通今迄に、一錢掠める我等でなし。氣も違はね共恥しや、きさと念比致せしを、由兵衞めが妬にこみ、何がな見出そふ〳〵と、文言知れぬ手形を書。きさ親子に判をさせ、旦那のお手に入し事、いかにしても覺束なく、此手形取らん爲計。戶棚の內でかすかに聞けば、旦那のお耳へ入らぬとやら。どふぞお耳へ入れずに濟む樣に賴み上まする。彼の眞直な旦那殿お心の蔑みが、首切るゝより悲しい」と、隱居の膝を戴き〳〵、疊に喰付泣き居たり。貞「やれ其云譯は己が心の了簡よ。主の腰の巾著あけ、屋內の鎰を盜み取、此だいそれた云譯が、でんどでそもや立べきか。由兵衞が我儘な手

わきへなり—横へそれる

ねたにこみ—妬を拘き

でんど—法廳

氣がふれて―落着かず

あつと云々―はいというて從はれぬ　差てもない―何てもない　打叩き―由兵衛に叩かる

形とは見たれ共、其場は其日の亭主方、無興と思ひ其手形は、とふに破つて捨たぞや。きさめと己を夫婦にして、末では所帶にしつけんと、此年寄が苦に持たも、斯う破れては水の泡。何程慈悲がしたふても、理を非には枉られず。目の明ぬ主と由兵衛などが云立ては、傍輩共も氣がふれて、跡で人も遣はれず、己に不便もかけられず、思ひ切てきさを由兵衛にやれ。時には四方圓く成、其方も是に勤よく、主の恩も送らるゝ。己が心持次第、池田の姪の中にても、女房には事かゝぬ。きさを遣るか何樣するぞ」と、我子に巽見をする如く、叱つ泣つわり口說、二郎兵衛も唯泣人て、暫時返事もなかりしが、二「一々のお詞聞入ぬは、畜生に劣る二郎兵衛なれども、あつと申て御恩はよも送るまい。元服を致したものを丁稚よりなを押下て、差てもない事云立に、踏ぬ計に打たゝき、虫でも堪忍なりがたき、無念を凌ぎ參りしも、お家のお影で一日も、きさと一所に住居をせば、由兵衛が面を踏返した同然と、思へば今日の奉公も、心まめしう勇しに、やみやみときさめを渡し、是や見たかといふ面が、見て居られふか口惜や。どふも私は堪ゑまい」と、無念涙は目にあまり、袖を喰切我身を擽み、身を懍はして歎きしは、心底道理にむざんなり。二「いや申ス程お主ゑの慮外。とにかく元の戸棚に入、彼奴が致した通、

情をはり―剛情はり
身代あける―身代をつぶす
あさじ祭り―朝の参詣り
籠ひつ―寝屋
己が情を云々―己の穏意のみを貫きて

錠をおろして下されませ。直に籠へ参らば、是今生のお暇乞、御恩を報ぜぬ段は、御免有て下されませ」と、はひ入る所を引出し、真「やれ恩知らずの物知らず」と、腹立涙の隙よりも、「十二の歳より飼育てし、二郎七の昔忘れたか。三日にあげず煩ひて、迚も用には立まじき、去せ〳〵と人侍に、いはぬ者もなかりしを、此婆一人情をはり、在所へ戻さば死るは定。本の慈悲とは此事と、十八の春まで、まじなひよ薬よと、孫子にもせぬ世話をして、四郎右衛門にも物入させ、やう〳〵と人になし、傍輩共も嫉む程、人に勝れ目をかけしに、籠ひつに入時、蓑屋の婆が阿房盡し盗人飼ひたて、親方は眼病なり、身代あけるも知ぬと、四郎右衛門迄謗せても、おのれが一分立たいな。御堂のあさじ参りにも、女子共起して、苦勞かけては後生にならぬと、己ばかり伴しに、明日より朝じに参られず、願ふ後生も願はせぬ淺ましい氣が附初た。此家に剛染ば犬でも猫でも、貞法は酷いめが見ともなく、可愛さにこそ口たゝけ。此上にも我を立て、己れが情をじやうにたて、死たくば戸棚へ入れ」と、泣ひつ威しつさま〴〵に、慈悲心餘る涙の異見、後世に入たるしるしなり。二郎兵衛聞入て「や御尤〳〵、今合點参つた。思ひ切て由兵衛にきさを遣りませふ」真「ム、夫が定なら誓文立て」三「來月は母の七年忌、此ごろ取越

奈落云々―仰に背かば母を地獄に墮すといふ誓文

おむく―無垢か

上本町云々―上本町の家を抵當にして七貫五百目貸附たる證文

一災起れば云々―災は相伴うて來るとの諺

致した此母を、奈落に墮しませふ」と、跡先知らぬ誓文の、ひとつは罰も當るべし。真ヲヲ出來いた〳〵。此家久しい重手代、由兵衛と張合て勝て負といふもの。何事も貞法が美しう濟して遣ふ。二階へ上つて最ふ寢め」と、戸棚の錠前しとおろし、「阿房めが。おきさ計が女房か。彼の樣な洒落者より、おむくむく〳〵の手いらずを抱せふぞ。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛」とて奥に入、心殊勝に哀れなり。二郎兵衛夢とも誠とも、氣もうつとりと成けるが、三「左もあれ彼の手形隱居の破つて捨てしとや。今破つたは何じや知らぬ」と取出し、合せて見れば、南無三寶、七貫五百目上本町の家質の手形、此晦日に元利殘らず相濟む筈。はアはアはつと明たる口も、何に塞がん身の罪科、一災起れば二災起る、雨雲の空恐ろしく、よろめく足本判の破れを引寄せて、合て見繼で見て、繼に繼れぬ命の難義、どふも生ては居られぬ。死るとも生るとも、きさは放さじ離れじ物」先此家を脫殼の、ひよろつく足を踏留め〳〵、表へ出る中の間の、合の戸そつと明れば、竹が蚊屋に丸裸、蚊を燒く紙燭明々たり。「エ、邪魔な爰を通らば咎むべし。アヽ如何せん何と扇」子の一扇ぎ、はつと消れば、竹アヽ悲し。憎の風めや火を消した。今宵一夜は蚤と蚊に、此肌を手向るじや。あつたら物を久三でもおじやらいで、二郎兵衛殿

とおきさ殿、挨拶見れば浦山しうてたまらぬ。此方も盆には在所へいて、あは畑でしけろ」と、ころりと寢たる音計、鼾の闇はあやなしや。漸〳〵と門口の貫の木堅き家の風、鎰は久三が預りにて、朝比奈ならねば門破り詮方つきて立居たり。預けられたるきさが身の、出ては姉の迷惑と、知れど夫の懷しさと、分て割なき割菊の、紋の風呂敷引包み、菱屋の門口樞の穴、覗いても音信は、蚊の聲ならで便りなく、胸じやくりして泣聲の、内へ微に聞ゆれば、二郎兵衛も樞の穴、顏を寄れば鬢の香の、梅花の薫は「おきさか」きさ「おいの二郎樣か、語りたい事計。爰がどふも明けられぬ。此戸一重が關守」と、互ひに身をすり氣をもがき、泣くより外の事ぞなき。浪花橋の辻に寢し犬一疋吠ふかゝる、聲につれて方々より七八疋、きさを威して吠立る。恐ろしなんとも詮方なく、放れがたなく門口に、猶取付て立たりしが、中の間の竹目を醒し「あれ久三、門にいかふ犬が鳴く。何も無いか起て見や」久「おふ」と答ゆる寢聲の返事、「そりやこそ久三」ときさは東へ、二郎兵衛は中戸の影にぞ隱れける。久三は例の襦袢一ツ、より棒提げ貫の木明け、耳門開いてつゝと出、久「ハテなんにもないもの非人がな通つたか。來い〳〵〳〵」と呼ば犬共尾を振かゝる。「エヽ蒸暑いが外へ出れば極樂の西風、エヽ忝い」と凉む間に二郎

挨拶―念頃の中あやなし―區別なし
朝比奈―三郎義秀にあらねば門破りかなはぬ
割菊―紋所
極樂の西風―極樂は西にある故

かけたり

くるゝ〜来るにかく

夢にだに云々—夢にも見ず又我々の死出の旅を夢にも親に見せぬこんど—來むにかく

和讃—佛法の意味を說きたる一種の歌

兵衞、積重ねたる染地の日野絹、一反解いてくる〳〵、身も頭も眞白に引包み耳門をぬつと飛出れば、久「なふ悲しや幽靈じや。幽靈よ〳〵」と、逃こみ門口はたと鎖す。三「危なや地獄極樂の堺を筋から是爰」と、招かれ寄りて「何事も、先此近所を退いての事、あては無けれど南の方、人や咎めんくる〳〵」と、絹をも包む世を包む、其風呂敷の木綿巾身のなる果こそ 三重

下之卷　二郎兵衞おきさ道行

歌　一ツとやひとつ涙の瀧の糸、落ちて三途の川となる。二ツとや筆もあれかし我心、書て後世に留めたや。三ツとや見たや聞たや故郷の、親の生顏夢にだに、夢さへ見せぬ死での夢、醒てはいつか此娑婆へ、歸りこんどの藪入は、女夫連でと約束の、盆正月の十六日を、待ち樂みし我々が、哀れ地獄の釜の蓋、開を待べき罪人と、呵責の責はよもやその、愛しいこなたかはいひそなた、脫すまいぞや脫さじと、縋り抱よせ泣姿、咎めて吠る犬の責、此世に地獄見せけらし。是も思へば親の罰、私は親よりお主の報ひ、育てられたるお情や、後生願ひの親方の、宵にや和讃夜中にや念佛、早眞夜中の月しろ

の、空を力に東堀、澄行水に影映る、我身の濁り恥しし。歌恥は暫しの浮世なり共、戀をする身の手本町とは、二人が心ひとつに米屋町共、思ひ計りて後生七生助かる。おれが殿御は日本おろかよ唐物町にも、稀な男のちよきりこきり小女房、花の樣なる和子を設けて、久太郎町とてやがて寺入久寶寺町、其豫言もいつしかに、空寢の夢の馬喰町、誠に私もこなさんも、跡には親のかれ殘る、老木の老の世はさかさまに順慶町も空ごとや、安東寺町も子故の闇に迷はせません不孝の罪、何と脫れん淺ましと、又引よせて泣く涙、袖にさし來る鹽町や、長からぬ世に長堀の、樂な世界を心から、九之助橋やこれや此、歌瓦屋橋とや油屋の、油しめ木の音に聞く、おそめに染めし久松は、いつの時雨の一雫、洗へど落ちぬ ナヨイ戀衣、世にひろがりしあだし名を、よそに謠ひしことの葉や、其油屋の一節も、師走油が身の上にイ、懸る涙とこぼれそひ、明日より同三味線に、法の灯し油屋の、回向をなすこそ哀なれ。ひとつ有さへ惜き世に、今宵限とほりづめや、命二ツを二ツ井戸、深い緣とて死にたいも、皆罪障の大和橋、あの千日に立つ煙、無常の雲のさつき雨、降ぬ先にと 歌死に場尋ねて、露にしみづく帷子、肩と裾とはおぼろ花色、腰に弘誓の舟に帆掛て、妻に磯馴の松原、是を最期に京橋やら、西に川口船の帆柱

米屋町―籾めにかく　ちよきり云々―きさの愛ちしき小柄なるをいふ　久太郎町―子供久寶寺町―寺入の緣　馬喰―奠にかく順慶云々―順といふもあてになちぬ　安東寺町―安堵にかく　鹽町―さしくる潮、九之助橋―苦にいひかく　師走油云々―火に祟る、お染久松の運命が今身の上に及べるにかく　法―可にかく　堀詰―放る　大和橋―山

京橋―いろはの最後に京字あればいひかく死にゆく―流行唄
行くもの―行くのもか
よは―歌の拍子

走りの先―流しの先にある菜刀
まぶられ―見つめられ
大ぐれ―大きな
駄

此處に恵比壽の松原、松のくろみか雨雲か、降らぬさきとて道急ぐ、早曉の旅人や。歌死に行くもの よは 知らいで人の、浮世仇口曲もなや。知らいで人の よは 知らずや人の、浮世念佛も頼もしく、傾く月を知る邊にて、空を拜めばをちかたに、とどろ〳〵と遠くなるおの海かと聞けば、あれ〳〵よそに轟く雷鳴の、落ちかゝるとも我妻を、よけて涙の袖おほふ。いや我は男よそなたをと、互に覆おほはれて、今死ぬる身も生身には、目に恐ろしき電光。野中の水に飛ぶ螢、御堂の影はまがはじと、歩みよろ〳〵足たゝぬ、恵比壽の森にぞ 三重 著にける。二人は松の下蔭に、どうど座を組み泣けるが、男は氣弱き若者、「アヽ譯もないことしたはいの。内に居る時走のさきの菜刀で成共、一人死ねば能い物を、死ぬるに連を拵らへて、旦那には事欠せ、家の名を出すと云、女房の親兄弟に、難義をかけるのぶといやつ、と死面をまぶられ、日比立てた正直も無になり、よしない者に緣ふれたと、そなたも世間の評議にあふ。許してたもや」と計にて、涙正體なかりけり。「なふ死際迄其樣に、私が事思ふてか、嬉しう御座る 忝い」と、ともに打伏し泣きけるが、「されば共夫は愚痴じやぞや。格好こそは大ぐれなれ、昨日今日の前髪を姉といふても大じないきさめが酷や殺した、と憎みは我身一つにて、そこは露ちり膚は

ね共、世間晴て宿小屋持、若い衆のつき合ひに、老女房持ッたとて、人が笑をが譏ろふが、此兩の手の有たけは、命限りに稼ぎ出し、まあ十五年辛抱すれば、こな樣は三十六私はちやうど四十一、老女房のゐとくに、男に家を買せたと、譏りし人にうらやませ、男に鰭を付ふぞと、思ふたこと云ふたこと、違へば違ふ現世さへ、未來は猶かし覺束なや。中有の旅の雲きりに、見失なふこと有共、犬死と思ふて下さるな。六道の辻にて必巡り逢ふぞや」三「ヲヽ、をんでもないこと。譬畜生界に落、虫けらに生るゝ共同虫と生れふと、思ひ詰たか」きさ「つめました」三「さは去ながら何に成らふも知らぬ身の、人界の見をさめ。ま一度顏がよふ見たいし」きさ「私も見たい」と引よせ〳〵、三「我故に殺すか」きさ「女房故に死なしやんすか。愛しぞや」三「愛しい」と盡きせぬ歎き干ぬ思ひ、思ひ亂る夏草の、しほれ伏てぞ泣居たる。三「あれ〳〵夜明も近付か、ちら〳〵人の通ひも有。二人が帶を結び繼ぎ、いふた通り」と解んとすれば、きさ「いや帶を解ては見ぐるしからん。此絹は親方の商ひ物、盗みはせね共、斷り云ねば盗みも同然。是を此木にゆはへ付、旦那の絹にて首くゝれば、旦那の手にかゝるも同然。一つの罪や脫るゝ」と、昔の例求塚是も男と女郎花、それはくねる是は又、うねりし松に手を取て、渡るも夢の浮橋や、

ゐとく―威德、効能の義
現世さへ―此世さへくひ違ふ現世して未來はと也
をんでもないこと―勿論の事
求塚―昔二人の男に思はれて入

水せし女の縁くれる―女郎花の縁にて男は死ぬる事をいふ　暗うて云々―暗くして見えず

無明の橋の最細き、心の罪に踏滑る、足を踏しめ踏しめしても上り煩ふ男の體、きき「女子の身でさへ上る物、是やどふぞいの」と手を引ば、二郎兵衛涙をはら〳〵と流し、「アア主の罰の恐ろしや。此足袋の片足は旦那のお古。常は兎もあれ此時は頭にも戴くはづ、土足にかけし其咎、お許しなされ下され」と、脱捨て登る松が枝に、きき「そりや電光鳴ふぞや。吃驚して落まいぞ」と、夕立頻る雷神、目ざすも知らぬ松陰に、何やら暗ふて見へてこそ、きき「慾深い事ながら、良をよせて下さんせ。電光の影に成共顔が見たい」三「見せたい」と、くはつと光ればわつと泣き、叫ぶ聲々雷神も、思ふ中をばよも裂ぬ、涙の雨に二重三重締付〳〵、二丈の絹も我々が、一つ蓮は一丈ぞ、往生淨土は一寸も、伸も縮めも「サアよいか」首の結びめ生々世々、解ぬ契りの堅結び、三「サアもふ物は云れぬ」きき「云たい事は御座らぬか」三「和女は無いか」きき「私は父様母様が懐しい是計」三「我はかみ様旦那の事、いふて盡せぬ此外は、唯南無阿彌陀佛ばつかりぞ」二人「サア只今が南無阿彌陀佛々々々々々々南無阿彌陀佛」と踏はづし、落る袂を引寄せて、抱き附ても苦みの、寄りては離れ離れては、足を縮め手を伸し、虚空を摑む臨終の、互ひの目には見へながら、物はいはれず岩代の、松にかゝれる下り藤、嵐になやむ如くにて、次第〳〵に弱り

一丈―一定にかく

果て、消行星と諸共に、一度に息絶へ目を塞ぐ、桁丈揃ひし死姿、刃に伏すは古手にて、

新物―縊死は新發明と也

これ心中の新物と、聞く人回向をなしにける。